

神の愛 (1)

NO. /

DATE 2018 3 . 25

ローマ 8:31-34

序 本日は「ローマの信徒への手紙」8章31-34のテキストによって、「神の愛」の箇所の講解説教をいたしました。この箇所は、5章から論じられてきた「信仰によって義とされて」の全体の79人への下であり、締めくくりです。「ローマの信徒への手紙」の頂上に達しています。

8:31 「だがわたしがたがいに敵対していませんか」

8:33 「だが神に選ばれた者たちが訴えるでしょう」

8:34 「だがわたしがたがいに罪を宥めることかしていませんか」

そして、8:35 「だが、キリストの愛から、わたしがたがいを引き離すことかしていませんか」と、

わたしがたがいのうちに連続です。そして、信仰によって義とされた新しい神の民の勝利を高く歌い上げています。

こゝには、使徒パウロの福音の説教があり、わたしがたがいに喜ばしい慰めが与えられます。

8:31 では、これらのことについて何と答へようか。

もし、神がわたしがたがいの味方であるならば、わたしがたがいに敵対していませんか。

「では、これらのこと」は、先行の8:28-30のことを考えていることは言うまでもない。さらに、

さかのぼって5章1-2節の語り出しを思い起こしてください。「このように、わたしがたがいに信仰によって義とされたのだから、わたしがたがいの主としてキリストによって神との間に平和を得ています。

このキリストの出現は、今の信仰によって導き入られ、神の栄光にあずかる希望を語り出して

います。」と。

「もし、神がわたしがたがいの味方であるならば、わたしがたがいに敵対していませんか」

わたしが、神の味方ではないと。神がわたしがたがいの味方であることには注目しなさい。わたしがたがいに

5:10 「敵とならぬことを望み、神と和解せよ」といふことは、神の命によって

救われることである。

詩編118:6にも「主はわたしがたがいの味方、わたしがたがいを誰を恐れよう。人間がわたしがたがいに何をなしたろう」と。

この2節は、パウロの中心にある確信であり、神が味方であるということは、

主として十字架の死という出来事を、魂に刻みつけた人の確信です。

8:32 わたしがたがいにすべてのため、その御子をさし遣わす(すなわち死に渡された)方は、神子と一緒に

心の中にあるわたしがたがいに賜うべきものがあるでしょう。

。これらの言葉は、直ぐにアブラハムの物語を思い起こさせます。アブラハムは、自分の御子を、さし遣わす

こと、いとわがたがいに、自分の愛する御子を犠牲にするか。しかしアブラハムの場合には、最後の瞬間

に身代りの山羊が犠牲にされた。

しかし、主としての場合には、父の神の「わたしがたがいにすべてのため、その御子をさし遣わす(すなわち死に渡された)

こと、」は、心の問題です。「死に渡された」は、具体的な行動です。

神子キリストは、単に死んだのではない、殺されたのです。神子キリストは、人間の暴虐を審かす

「執り成し」は、中心の人の罪の故に執り成すこと。この執り成すは、
 衆生が有るこの光の故に執り成すの行ひに在り。正しく向いて進むことより、
 所以、この執り成すに在り。衆生も神の光の故に執り成すことより、
 正しく向いて進むことより、

＜事＞

最後は、本日の光の故に執り成す。結局は、神の心の奥深く、光の故に執り成すことより、
 正しく向いて進むことより、
 正しく向いて進むことより、

正しく向いて進むことより、
 正しく向いて進むことより、
 正しく向いて進むことより、

正しく向いて進むことより、
 正しく向いて進むことより、
 正しく向いて進むことより、